第8回外国人留学生作文コンテストについて

1. 募集期間　　平成23年11月24日（木）～平成24年1月6日（金）

2. テ ー マ　　①「国際交流のために、わたしができること」
②「日本での発見」　　（2つのうちどちらか1つ）

3. 応募人数　　21名

4. 選考経緯

（1）審査委員会

審査委員長	塩井実香	香川大学インターナショナルオフィス講師
審査委員	丹羽　章	四国学院大学文学部教授
審査委員	和田　浩	高松大学発達科学部子ども発達学科准教授
審査委員	畑　ゆかり	穴吹ビジネスカレッジ日本語学科教務部主任

（2）審査委員会の開催

①第1回審査委員会

日　時；平成24年1月24日（火）10：00～

場　所；香川大学研究交流棟6階第1講義室

②第2回審査委員会

日　時；平成24年2月16日（木）10：30～

場　所；香川大学研究交流棟6階第1講義室

5．選考結果（入賞者）

優秀賞

香川高等専門学校詫間キャンパス情報工学科　３年　ヘイン　シウホン

佳　作

穴吹ビジネスカレッジ日本語学科　２年	ヒョウ　ヨウ
香川大学工学部　４年	金　柱大
徳島文理大学文学部　３年	ユ　ヘス
香川高等専門学校高松ｷｬﾝﾊﾟｽ機械工学科　３年	ﾑﾊﾏﾄﾞ ｲｸﾗﾑ ﾋﾞﾝ ﾉﾙﾊﾝ
香川高等専門学校高松ｷｬﾝﾊﾟｽ制御情報工学科　３年	ﾁｮﾝ ｼﾞﾝ ｼﾞｮｰ

「国際交流に出かけましょう」

ヘイン　シウホン
（カンボジア）

所属学校　香川高等専門学校　詫間キャンパス
出身国　カンボジア
氏　名　ヘイン　シウホン
テーマ　国際交流に出かけましょう

この世に生まれたら、誰でも平和で、贅沢な生活を送りたいという願望を持つのは当然だろう。しかし、なぜ世間ではたくさんの戦争および紛争が生じるのだろうか。例えば、カンボジアとタイのように、長い間、国境の問題が続いている国もある。例を挙げると、プレアビヒア寺院遺跡についてであるが、何年も前からずっと両国は遺跡を巡り争っている。そして、2008年にカンボジア国としてプレアビヒア寺院が世界遺産リストに登録されることが決定されると、両国の国境紛争は深刻な問題になり、現在まで多数のけが人や死者が出ている。

このことは、なぜそんな紛争が起こるかを私に考えさせた。両国は隣同士で国際交流が欠かせないにもかかわらず仲がうまくいかない。両国は独自性をお互いに主張する為に、その所有権争いが生じると言う結果になるのではないかと私は思う。もし昔から良く交流をして、地理や歴史など色々な文化をお互いに伝えていたら、そんな現在の国境の問題などは無かったのではないだろうか。カンボジア人の一人として私は、母国のために何を貢献できるかと以前から思案していた。日本に進学した私ができる次のようなことを思い付いた。それは母国の文化と日本を始め、世の中の様々な国とできる限り国際交流をして、お互いを尊重し、文化の理解を深めていけば良いということである。

この作文では、これまでの日本の現場で実際に国際交流した体験を中心に、どのようにすれば、お互いに文化を理解できるのかについて、私なりに考えてみたいと思う。その後、自分の体験したことへの理解・感想も含め、もっと交流ができるように、今後の計画も述べたいと思う。

ここ日本に住み始めて約二年があっと言う間に過ぎ去った。最初に東京に着いたとき、一つの素晴らしい日本の文化が私を感動させた。それは、日本人のお花見会である。私は去年の四月に日本に来て、先輩たちと一緒に代々木公園でお花見に行った。その時たくさんの日本人が家族や友達などと一緒に、桜の木の下で食事をしたり遊んだりしている所を見て、私は考えた。日本に来る前に、日本人が毎日とても忙しく生活が大変だとよく聞いていたが、実際に日本に来ると、少し違っていた。日本人は仕事や勉強が大変だが、また時間を割いて、リフレッシュし、家族や友達といっぱい楽しい時間を過ごして、本当に素敵な生活を送っていると私は思った。それを見ると、人生の中に大変な時もあれば、休み時間もあるので、仕事・勉強の時間と休み時間を明確に区別するということは非常に重要だと私は考えた。

また或る時、私は東京日本語学校における小学生との交流会のプログラムに参加し、小学生たちの前でカンボジアの位置やクメール語の挨拶言葉のような基本的な事柄や、母国の小学生生活を発表した。その際、一番驚いたのは、小学生たちが私の発表の前に、カンボジアに関す

る料理や結婚式などをすでに調べてくれていたことである。日本人の子供たちは、小さい時から、読書の能力をどんどん高めながら、知識も広げ、大きくなると社会に出て、社交的な人になるということが分かった。日本はそんな素敵な教育があるからこそ、人材に富んで、国を急速に発展していったのではないかと思った。その点で、母国の子供たちに対して、そのような教育が必要なのかもしれないと私は思った。

さて、香川県に来てから、私は何ができただろう。今年の四月に、私は香川高等専門学校詫間キャンパスに進学した。校内に留学生は五人しかいないが、幸いなことに交流のためのイベントは十分実施されている。一例を挙げると、ドリアンクラブと言う交流クラブがあり、毎月第三日曜日は、先生とお祖父さん・お祖母さんたち・留学生たちと、交代に日本の料理や留学生の国の料理を一緒に作り、色々な国の話をしながら、作った料理を食べる。そこで、私は先生たちとお祖母さんたちから一つのことを学んだ。それは、食事のマナーである。もちろん、食事の前に「いただきます」と言い、食事の後「ごちそうさまでした」というのは重要だが、箸の使い方も重要であるという事が分かった。祖国では食事のとき、スプーンを使うので、箸の使い方は良く分からなかったが、箸の使い方について、私には驚くことが結構あった。例えば、してはいけない刺し箸のマナーもあるし、渡し箸というマナーもある。さらに、最も用心しなければならないのは拾い箸と立て箸であると先生がおっしゃった。拾い箸というのは、箸にはさんだ料理をそのまま別の人が箸で受け取ることである。なぜこれは駄目なのかと言うと、火葬場でのお骨ひろいを思わせるのである。また、ご飯の中央に箸をつき立てるという立て箸は、仏式の葬儀の時に死者に捧げるご飯の形になるので、注意しなければならないと先生が教えてくれた。日本人にはそんな小さいことにすらマナーがあるからこそ、礼儀正しいと言われるのではないかと私は思った。

また違う機会に、マリンウェーブで行った月見会に参加し、日本の茶道を初めて体験した。お茶を飲むために、お湯を沸かしてからお茶ができるまで、一つずつ動作が進み、飲むときも飲み方があり、使う茶碗も季節によって違うということが分かった。茶道は、何かをする時、私たちに「落ち着きなさい」ということを教えたいのだと言われているが、私は本当に良いことだと思う。行動を成功させるためには、落ち着いて取り組むことが大切だと私は考えるからである。

今までの経験により、国際交流を経由して文化を広げるために、これから何をすべきかを自分なりに考えてみたい。一つは、勉強しながら日本国内の多くの場所に行って、日本の文化を理解しながら、祖国の文化も伝えることである。また、両国の文化をお互いに理解するのに、交流のイベントやボランティア活動などにもできるだけ参加したいと思う。例えば、アジアコミュニティセンター２１（ACC21）が行っているアジア留学生の東北大震災ボランティア活動に、できれば参加したいと考えている。カンボジアは東南アジアに位置し、地震や津波などはほとんどないが、日本の大震災の教訓を、カンボジア人に理解して欲しいと思うので、私が津波の現場に行って得たことや経験したことを、帰国したときに母国の皆に教えたいと思って

いる。また、お互いの助け合いが大切だということも伝えたい。もちろん、母国は日本より自然災害が少ないが、カンボジア人として、お互いに助け合いの気持ちをいっぱい持っていることを表現したい。

日本の文化をカンボジア人に伝えるのは重要だが、祖国の文化も日本人に理解してもらいたい。つまり、日本人にカンボジアに遊びに行って欲しいということである。カンボジアに行ったら、アンコールワットのような文化や、人々の生活や特徴などを理解できるだろう。そのために、私はできる限り、カンボジア国について発信したいと思い、交流イベントがあれば参加したいと考えている。例えば、四国にある５校の高等専門学校が開催している総合文化祭に参加しようと思う。そこに来て下さった人に、カンボジアのことを少しでも分かってもらい、カンボジアに行ってみたいと思ってもらえたらうれしい。

また、最も重要なのは、帰国後、日本での体験や勉強などを忘れずにカンボジアの人々に伝えることによって、母国の発展に貢献することであると思う。カンボジアと日本との掛け橋になりたいと希望している。カンボジアが発展できるように技術を始め政治や経済など、留学中に学んだ様々な日本の文化の良いところをお手本にして、国の発展に貢献したいと思っている。一例として、祖国の子供たちに関する教育はまだ十分ではないので、日本のように改善したい。そのために、私は帰国した時に先生になって、他の先生と相談して良い方法を探し、カンボジアの教育をゆっくりと改善したいと考えている。

これまでの約二年間はとても楽しい留学生活だったと言える。その上で、これからも、自分の決意したことを忘れずに、活動を広げたいと思う。

もちろん、文化を広げることは、私一人ではできないだろう。すなわち、皆の協力が必要である。世の中にたくさんの国々があって、似ている文化があれば異文化もある。「郷に入っては郷に従え」と言う言葉があるが、私たちも一緒に国際交流に出かけてみてはどうだろうか。

「日本での発見」

ヒョウ　ヨウ
（中国）

『人生の岐路』

馮　瑶（ヒョウ　ヨウ）

人生において、岐路に立たされることは何度かあるでしょう。その中で、いつが一番大切なのでしょうか。私の国、中国では、それは高校時代だと言われています。

小学校時代は、世界を認知する時代。中学校時代は、友達を作り、社会を理解する時代。そして高校時代は、社会に入る前の準備の時代。つまり、人生の一番重要な岐路だと考えられています。有名な大学に入り、一流企業に就職することは、誰もが切望する道でしょう。しかし、この道の上を道通りに進むことは、簡単なことではないと思います。私は高校時代、それを実感することになりました。成績が悪く、希望の大学に落ちてしまったのです。人生の一番大切な道は私を通してはくれませんでした。

道を踏み外し、どうしていいか分からなかったのですが、その時、母が別の道を用意してくれました。それは日本への留学という、私がそれまで考えもしなかった道でした。その新たな道に対して、私は様々な感情が交差していました。自分の人生をもう一度やり直すチャンスがもらえて嬉しいという気持ちと、中国から遠く離れた外国で勉強するという寂しい気持ち。先進国である日本で勉強するというのは夢のような話でしたが、まだ当時 19 歳の私にとって、両親のそばを離れるということは何よりも辛いことだったからです。

そんな気持ちを抱えて日本に来ましたが、予想外に私は日本をすぐ好きになってしまいました。街はとてもきれいで、また、日本人はとても親切だったからです。私が上手く話せなくても、いつも笑顔で何度も繰り返し話をきいてくれました。その親切さはありがたいものでした。また、日本人は非常に礼儀正しく、食事の後、作ってくれた人への感謝の気持ちを忘れず、必ず「ごちそうさま」と言います。これは中国にはない礼儀です。内向的で気の弱い私は、日本人の親切さに上手く応えることができませんでしたが、感謝するという気持ちを教わることができました。

ただ、日本語の勉強に関しては喜べないことが多いのです。私は日本に来て一年が過ぎた頃、一年も経つのに、「はい、そうですか。」「ええ、そうですね。」くらいしか話しませんでした。決して上手とは言えないレベルでした。それでも、その時は平気でした。話している内容はだいたい分かるし、こんなものだろう、と現状に満足していました。しかし昨年の 7 月、授業で先生に伝えたいことが伝えられなかった時、恥ずかしくてたまらない気持ちになりました。その夜、真剣に自分の将来のことを考えました。私は日本語の能力や勇気、個人の能力など、まだまだ足りない部分がたくさんあると気づきました。数年後、私は社会人になります。社会人になれば、当たり前のようにみんなの前で意見を言えるようにならなければなりませんが、私にとってこれはとても苦手なことでした。まず、大きな声で話すことができないし、その上、他の人の意見に従うということがもうすっかり習慣になってしまっていたからです。何とかしなければ、という気持ちでいた頃、偶然日本語スピーチ大会募集のポスターを見たのです。

私はこのスピーチ大会に参加しよう、という気持ちが湧いてきました。自分の人生を変えるきっかけになると直感したからです。失敗はもちろん怖いけれど、失敗しても、成功までの距離は近くなるという誰かのことばも私を後押ししてくれました。たとえ 100 回しても

101 回目チャンスがあるはずですから。とにかく自分の人生を変えたい、という気持ちで参加の決意をしました。

先生方の指導を受けならが、１か月間の練習を重ねて、当日は緊張せずに話すことができました。しかし、残念ながらいい結果はもらえませんでした。失敗は成功への近道、と強い気持ちで臨んでいた私でしたが、やはり結果を見ると、悲しい気持ちになりました。

しかしそんな時、スピーチ大会の前後に身近な人々からいただいた様々なアドバイスを思い出しました。学校の先生はスピーチ大会の前に、「これからチャンスがいっぱいあるよ。」とおっしゃいました。アルバイト先の方からは「人生はこれからだよ。」とスピーチ大会の後に励ましのことばをいただきました。また、アルバイト先の店長からは、一つの質問をされました。「成功の反対は何だと思う？」この質問に対して、私は当然、失敗だと思いましたが、店長は「それはあきらめだ。」とおっしゃいました。これらのことばを思い出すたびに、私は元気が出ました。そして、私のためにやさしいことばをかけてくださった人々の存在のありがたさを実感しました。今でも思い出すのはスピーチ大会に向けて努力していた日々です。あの時が一番充実していたと思います。

かつて、「もうあきらめようかな。」と考えたことがあります。しかし、あきらめたらチャンスは永遠に手に入りません。逃げるのはダメ。階段も足を上げてみないとその高さはわからないのです。その時上れなくても、次にどのくらいの高さまで足を上げればいいかが分かります。だから、人生のどんな道でも勇気、自信をもってあきらめないで歩いて行きたいです。自分の弱点を発見してそれを改善していくことにこそ、生きている意味があると思います。自分の能力は自分の努力次第で向上します。それは、過去の自分とは関係ない、と私は信じています。

日本での約２年間の生活は、私の人生での一番重要な岐路だったと言えます。失敗を経験した私にとって、成功するまでの道はまだまだ長いと感じますが、あきらめずに続けて、いつか必ず自分に打ち勝ち、成功を掴みたいと思います。親切な日本の人々、日本の風土は私の夢を多彩にさせ、新しい自分の可能性を教えてくれました。日本があって、今の私がいます。その日本に対して、私はとても感謝しています。ニッポン、ありがとう。

「日本、そして高松」

金　柱大
（韓国）

日本、そして高松

キム・ジュデ

だんだん国際化になっている現在の大学生なら誰でも海外への留学を考えると思う。私もそういう気持ちを昔から持っていたが、25歳になった今良い機会を得て、日本の香川大学で１年間の留学生活することになった。

私は日本の中でも四国に位置する高松市へ2011年10月4日、望みに望んだ日本留学に来た。留学に来る前に東京を2回旅行した経験はあったが、留学という新しい経験に対して大きな夢を抱いて日本に来た。

留学するまえに私が考えていた日本は、開放的で先進文化を持っている国だと思っていた。それから3ヶ月がたった今、日本文化を完璧に理解することはできないが、3ヶ月間の生活で発見した日本を文書に書いてみようと思った。

飛行機から降りて到着して初めて見た高松空港は田舎の小さくて古い空港だった。空港の前は田畑で、ただ小さい田舎町の姿を見せていたから、がっかりして「こんな所で学ぶことがあるのだろうか。」という気持ちで、これから1年をどういうふうに生きていけばいいのか心配した。

しかし、このような心配は一週間後に完璧に変わった。学校に行くために家を出た私は韓国ではバスと地下鉄を利用したが、ここでは交通費が高いので自転車を利用して登校した。自転車に乗って登校する私は日本の交通ルールを見て「このような交通ルールは母国の人たちも見習うと良いだろう。」と思った。

韓国で事故の経験があって、車を運転する人を信頼できなかったために、日本でも自転車に乗ると危ないだろうと思った。しかし日本の運転手はいつも速度と自動車停止線をしっかり守って運転するため、自転車を利用する人が、運転手を信頼できるようにしてくれた。韓国では逆にほとんどの韓国人は近いところでもバスや地下鉄を利用して移動する。

運転手と歩行者間の信頼が高まったら、安心して自転車に乗れるし、韓国も近いところはバスや地下鉄より自転車を利用する人がもっと多くなって環境にも良い作用となるであろうと思った。世界の人々が皆、環境を大事にするエコ活動を生活の中で行っていけば良いと悟った。

その後何日も経たないある日だった。タバコを吸う私は校内では禁煙だから、校門の前でタバコを吸っていた。校門前にはゴミと吸殻が捨てられいたし、その捨てられた吸殻とゴミを、通り過ぎる市民が拾う姿を見るようになった。このような光景を見た私は、この姿こそが日本の市民としての意識が先進国だということを表現しているのではないか、と思うようになった。

また、大多数の人々が道を歩いてタバコを吸わないし、ゴミも捨てないし、違反横断もしなかった。日本人のこのような意識と国を思う気持ちが今の日本を作ったように、世界のすべての人々が道でタバコを吸わないでゴミを捨てなかったら、世界の環境汚染を防ぐのに役に立つと思った。

でも、日本の文化にも改善されなければならない部分がある。　例えば TV番組は夜の時間になれば暴力的なものやエッチな内容のものが多いようだ。視聴者の中には

子供や女性たちも含まれるでだろう。このような番組によって子供たちが受ける影響は、彼らの情緒に大きな問題を与える要素であり、女性たちが見る場合は、不愉快に感じたり女性卑下などを感じる恐れがある。だから、このような番組は深夜の時間帯に移したら良いと思われる。

このような番組によって子供たちが受ける日本で生活した中で発見し、感じたこと以外にも、すばらしものはたくさんあった。それは高松の食べもの、そして雄大な自然の景色だ。食べ物では、いつもお腹が空いている私に満腹感をくれるさぬきうどんがある。そして、高松の全景を見下ろせる屋島山からの夜景や、洗練された日本式の庭を味わえる栗林公園の景色、まんのう公園で眺めることもできる、とても大きく澄み渡った空もある。私は留学生として来る前、日本のすべての都市は東京の華麗さだけでできていると想像していた。

しかし、高松での生活の中で、東京の華麗さよりは高松の素朴さ、そして市民の皆さんの誇りと市民意識を感じ、全てが絡まって日本、そして高松を輝かせているのではないかと思った。

「いける　日本！」

ユ　ヘス
（韓国）

いける　日本!

徳島文理大学　留学生　ユ　ヘス

『いける』という言葉は、行くの可能型で行くことができという意味を持っている動詞だ.
私が日本に来る前までは、知っていた『いける』は‘どこでも行ける’のようなそのままの行けるだった。しかし、日本に来て日本の友達も付き合って生活をして見ると『いける』という動詞は本当に珍しい単語だったということを見つけることができた。これは以前にはしらなかったんだけど、日本で発見したことだ。
それは、何ヶ月前日本人の友達と一緒に鍋をたべる時であった。
友達が鍋をたべながら、‘キムチと鍋一緒に食べてもけっこういける’と言った。瞬間、私は荒てた。今、こんな状況で行けるなんてーキムチと鍋一緒に食べてもかなり行ける? どこを行くかなぁ? 私は意味もわからなかったまま‘うん！’と答えた。行くの可能型だけで勉強した私にそれはちょっと無理だった。今度はデザートをたべる時だっだ。友達は‘このアイスクリーム、いけるいける！’と言った。このアイスクリームを行ける？アイスクリームを食べに行こうの意味かなぁ？私は一人で変な解釈をしていた。『いける』はいったい何だろう? 友達に聞いて見た。‘今しきりに言ったいける、行くの可能形じゃない?’友達は笑ってしまった。‘いままで行けると聞いていたの？’そして、こんなに言った。‘へす～いけるはただ行くことができるという意味だけを言うのではないよ～さまざまの意味があって!会話でよく使われるよ～’私はいけるという言葉が調べたくなった。
私は家に帰って『いける』に対して調査して見た。『いける』には、私が知っていたことよりずっと多い意味を持っているし日本でよく使われていた言葉だった。そういえば番組でも『いける』という字幕がたびたび見たことが思い出した。
食べ物に関する状況での『いける』は‘食べ物が食べられる’の意味だった。つまり、‘お口に合う’意味であることだ。その時友達は、‘鍋とキムチ一緒に食べればおいしいよ’
‘二つがよく合う’ このような意味で言ったことだ。
そして『いける』には、‘よくできる’、‘うまく行く’、‘ 大丈夫’だという意味もあった。こんな状況でいけるが使われる。‘『映画際』のポスターなんだけど、いいアイデアがあるんだ。カメラが『映画際』って言う字を指し映しているんだ。’‘おもしろいね、それいけるかも！’ここで、『いける』は‘大丈夫ね～’‘けっこういいかも～’‘いいじゃん～’と同じ意味だ。何か『できる』の感じだと思う。また、私がよく使っている言葉で『イケメン』があって、この言葉の秘密も分かるようになった。『イケメン』は、『いける（うまく行く・大丈夫の意味）＋ マン（男）』二つの組合だった。『イケメン』はよく使って

きた単語だったけど、どんな組合で作られたかはしらなかった。そして、日本の番組で『めちゃめちゃいけてる』があった。いつも、その意味には別に関心がなかった。でも、今は‘おびただしくうまく行く’の意味だったということも分かるようになった。

日本人がたくさん使う言葉『いける』、どんな状況にもよく合う言葉『いける』、いろんな意味を持っている『いける』。私はこれこそ日本での発見と思う。韓国で本を見ながら文法的だけで勉強した私には、分からなかった『いける』の世界。日本へ来て実際の経験によってごれを分かるようになった。『いける』に対して分かった後から、私の耳に『いける』がよく聞こえた。『いける』を知らなかった時には聞こえなかったのに、実際に会話でおびただしくよく使われていた。今は私がもっとたくさん使うようになった。『いける』というたった一つの言葉が多いことを現わすなんて本当に珍しかった。

日本での発見で『いける』を通じて別個にもう一つ発見したことがあった。これは、真正な勉強ということだ。私は日本へ来る前までは、つまらなく詰めこみ主義で勉強した。本だけを見て覚えてまた覚えた。だから、面白さも失ったし勉強の間口広めることができなかった。しかし日本にきて見たら、本ではない実際に生活をしながら学ぶこと、自ら困難にぶつかりながら直接感じて学ぶこと、これこそもっと面白くて意味ある真の勉強だということをわかった。私が『いける』を発見したような！

本を見ることだけでは真正な勉強ができないということを感じた。日本での留学生活がいつのまにか4ヶ月が過ぎてしまった。日本に来て直接体験しながら日本に対して一階もう分かった。 学ぶことがこんなに楽しくて幸せか初めて分かるようになった。

今からはもっと熱心に日本を感じて，だくさん発見して行くつもりだ。

‘今年も、私いけます！’

‘いける！日本’

「日本で発見する」

ムハマド　イクラム　ビン　ノルハン
（マレーシア）

日本で発見する

ムハマド　イクラム　ビン　ノルハン

子供達はみんなどこの国でも留学というものをしたいと思う。もし留学をすれば、他の国の文化を学ぶだけでなく、色々な観光地へ見に行けるからだ。私も子供の頃、そういうことを考えた。実は私の父はイギリスに留学したので、羨ましいと感じた。私は父に負けないように意志を持って中学校で頑張って勉強してやっといい結果をもらった。その結果、幸運にも日本に留学することを選べたので感謝している。

今、８か月間日本で留学している。時間が早く過ぎたと感じている。４月９日に日本に来たばかりの時は、桜が咲く期間だからとてもきれいだった。写真で見るのと違って実際に花見へ行ってやっぱり美しい景色が見られた。日本は春、夏、秋、冬の季節があるので四季と言う。日本と違ってマレーシアでは、一年中、乾季と雨季とに分かれているのでマレーシア人にとって季節が変わったとはあまり感じていない。毎年春になると、日本の各地で美しい桜が咲き、人々を楽しませる。しかし、桜は開いてからたった四日か五日で散ってしまう。そこで、桜が散らないうちに、花見に行って色々なことを楽しむ。そして、花見は農民達にとって大切な意味がある。農民は満開の桜を見て、秋には米がたくさん実り、食べ物には不自由しないことを願うと言われた。６月になり夏になると、気温がだんだん上がって暑くなって雨もよく降る。この時期にはマレーシアの気候と同じように感じた。私は８月の中旬に高松市で盆踊りを見に行った。その時、祭りがあって人々が集まったり、踊ったり、屋台が出ていたり、日本人は浴衣を着たりして、本当に賑やかで楽しい時期である。夜に花火を見て涼しくてきれいだった。

秋になると、また寒くなる。郊外だけでなく、高松市内にも畑がたくさんある。大体１０月の頃、米は黄金色になって初めて稲刈りを見た。マレーシアには、米の産地があるが、普段、稲を収穫するのはあまり見られない。秋の中旬に紅葉が赤と黄色に色付くのが見える。冬になると、もっと寒く感じる。１２月下旬は日本人は忙しそうである。お正月を祝うために、大掃除をして、新しい年を迎える準備をする。冬を考えれば、雪で遊びたいと思う。雪が降るのを楽しみにしている。

季節が変わると、環境や服装などだけでなく、人々の心もかわっていくと思う。例えば、お正月である。大晦日に日本人は家で掃除をしたりして、精神的に新しい年を迎えて神様に今年がいい年になることを願う。日本の季節の素晴らしさだけでなく、日本人の性格も尊敬に値する。

日本人はどんな仕事をやっても、完成まで一生懸命にやる。私は出かける時、道に沿って歩くと、いつもお年寄りが見える。畑を管理する人がいるし、散歩をする人もいる。色々な仕事をやる。普通に考えれば、その年配は家で休んでのんびりするはずだが、日本人の年配はそういうことを考えていない。私はこのことを考えれば考えるほど疑問になる。このことはマレーシアの年配と比べて本当に違う。日本人は世界で一番長い寿命と言われている。日本人は健康を大切に維持して子供の頃から栄養のある食べ物を食べて病気にならないと思う。日本人が仕

事をするのは習慣になる。お年寄りでも時間をむだにしないように有益な活動をするのでとてもいい習慣だった。この習慣のおかげで、仕事を早めにやって遅延なく完成をさせることができる。

マレーシアのことわざに「時間は金である」がある。時間の大切さを表す。日本人の生活を見ると、このことわざが当てはまる。日本人は本当に時間を守ると思う。もし日本人が時間を守らなかったら、日本は米国と中国に次いで世界第三位の国民経済にならないだろう。日本の電車が時間を守るのはだれも認めると思う。電車を使ったら遅刻の心配をせず計画ができて凄く便利だ。もし電車が５分早めにとか遅れるとかであれば外の電車の予定を面倒にさせる。だから、時間を守らないわけにはいかない。ドラマ「プロポース大作戦」を見ると、なんとタイムスリップがあった。現実には、そういうことはないので遅延なくちゃんと仕事しなければならない。どんなことを体験しても過去は戻って来ないのでそれぞれのチャンスをのがさず頑張りましょう。

「日本での発見」

チョン　ジン　ジョー
(マレーシア)

日本での発見

チョン　ジン　ジョー

もし日本へ旅行する機会があったら、あなたは何がしたいですかと質問されたら、多くの人は必ずこのように答えるだろう。「寿司を食べたい。」「温泉に入ってみたい。」「お祭りに参加したい。」そう、日本へ旅行する機会があったら、必ず日本の文化を体験したいと多くの人は思っているのである。私もその一人である。

今年の四月、私は留学生として香川高専に勉強しに来た。日本の文化が体験できるようになって、私はとても嬉しかった。私は日本に着いたその日の夕食は寿司だった。マレーシアにいた時、私は生の食べ物を食べたことがなかったので、寿司はどんな味がするかを楽しんでいた。寿司は意外に変な味はしないで、とてもおいしかった。なぜ世界中で寿司に人気があるのか、今なるほどと分かった。生の刺身とご飯でできた寿司の感触は一般の食べ物の感触と違う。寿司を食べると、海鮮の新鮮さが感じられる。しかも、生の刺身には天然な甘さが感じられる。だから、多くの人は寿司が好きなのだ。これは私の日本での発見である。

そして、私にとって、最も体験したい日本の文化はお祭りであった。とうとう五月に、私はお祭りに参加することができた。そのお祭りはお城祭りといって、丸亀で行われた。私は「UNESCO」という国際交流団体の一員としてお祭りに参加した。私の役割はおこわという食べ物を売ることであった。その場に着いたらすぐに、私はひとりの日本の友達と一緒にお祭りを歩いて見て回った。最初、私は吃驚した。なぜなら、人々が大勢いるからであった。私は初めてこんなにたくさんの人々を見た。むしろ、人ごみと言ってもいい。それだけではなく、道路の両側にたくさん店が並んでいた。食べ物を売る店はもちろん、玩具を売る店や衣服を売る店などもあった。しかし、人気がある店はもちろん食べ物を売る店である。たこ焼き、焼きそば、からあげ、天婦羅などの日本の有名な食べ物をはじめ、バーガーやピザなど外国の食べ物まで売っていった。そして、人々は食べながら、友達と話し、お祭りを歩いて回っていた。お祭りの全体の雰囲気は本当のにぎやかであった。そのにぎやかな雰囲気で囲まれて、私は食べたことがない食べ物を食べたり、友達と話したりして、本当に楽しかった。その後、私は店へ戻った。私は外国人だから、時々お客様が寄ってきて、私と話した。私もできるだけに彼らの質問に答えた。

そして、私はもう一つのお祭りにも参加することができた。それは夏休みの間に行われた高松祭りであった。私は踊る外国人として高松祭りに参加した。高松祭りは大体お城祭りと同じである。しかし、高松祭りは夏に行われるお祭りなので、お祭りが始まったその日の夜には花火大会があった。夏に行われるお祭りには花火大会がないわけにはいかない。その上、必ず踊る人々がいる。それだけではなく、高松祭りには射的やヨーヨー釣など日本の遊びをやってい

た店があった。やったことがないので、私もそれらの遊びをした。初めてするので、私はなかなかうまくいかなかった。そのせいで、私はたくさんお金を使ってしまった。でも、私は楽しんでいた。

二つのお祭りに参加した後、それぞれのお祭りにはそれぞれの特徴があることが分かった。そこで、私はお祭りについて調べた。日本のお祭りは四季にわけて行われる。すなわち、春、夏、秋、冬に、必ず一つや二つのお祭りがある。しかも、地域によってお祭りも違うし、行われる時期も地域によって異なる。

春は田んぼや畑の仕事が始まる季節である。この時期には、作物が豊かに実るように、神様に願う祭りが日本各地で行われる。夏は暑いので、病気がはやったり、災害が起こったりすることがよくあった。こうした病気や災害を悪霊のたたりと考え、それをしずめるために始められたのが夏祭りである。また、秋は、米や果物などの収穫の季節なので、その米や果物を神様に供えて感謝するために、秋祭りが行われる。最後の冬には、弱まった生命力を復活させるための冬祭りが行われる。このように日本には、四季を通じてさまざまなお祭りが伝えられている。

私はお祭りをただの日本の伝統ではないと思っている。私の考えでは、お祭りは人々の関係をもっとつなげる役割をする。なぜなら、お祭りへ行く人々は子供をはじめ、お年寄りまで行く。その中に、友達同士や家族同士の人々がたくさんいる。皆は一緒に歩いたり、話したり、食べたり、笑ったりしている時、知らないうちに、友達同士や家族同士の関係がもっと近くなり、深くなる。普段の時、皆は自分の生活で忙しい。そのために、友達や家族と一緒にいる時間があまりない。そこで、お祭りは人々がお互いに出会うことができる場所を作った。

私はお祭りを通じて、日本の文化を習った。だから、お祭りは私にとって、日本での最大の発見である。日本には私が知らないことがまだたくさんある。そのために、私は必ず日本各地へ行って、日本の色々なことを発見する。